北國健康生きがい支援事業

平成30年度 石川県立看護大学プログラム　今後の防災のあり方

家庭、地域で対策柔軟に

北國健康生きがい支援事業の2018年度石川県立看護大学プログラム「私たちが考える今後の防災のあり方～被災地と地元防災訓練で学んだたくさんのこと」は9月24日、北國新聞20階ホールで開かれました。同大の武山雅志人間科学領域（心理学）教授らが各地域や家庭の実情に応じ、柔軟に災害対策を進めるべきだと説明しました。

講演

講師 武山雅志氏 石川県立看護大学人間科学領域（心理学）教授

若い世代も訓練参加を

講演する武山教授

災害が多発

今年の夏は、西日本豪雨や北海道胆振東部地震など大規模な災害が立て続けに発生しました。石川県内でも、能登地方を襲った8月の大雨や、台風の被害を目の当たりにし、いつ、何が起こってもの不思議でない時代であると痛感しているところです。今まさに、災害対策の必要性が高まっているのではないでしょうか。

県立看護大学では、地域の防災訓練に積極的に参画しています。東日本大震災をきっかけに、学生による災害ボランティア・サークル「ふたば」を設立し、防災訓練では応急処置方法を住民に指導するなど、看護大学ならではの取り組みを進めています。

訓練に参加する年齢層は高齢者が中心です。30～40代の若い親世代にいかに参加してもらうかが課題となっており、児童生徒の注意を引き、親を連れ立って参加するような仕掛けが必要だと感じています。

「自己効力感」高まる

加えて、東日本大震災をきっかけに、学生による被災地訪問を続けてきました。2012年から訪問している宮城県亘理町では、住民から「学生さん、今年もまた来てくれたのか」と歓迎されています。

ボランティア活動に参加した学生にアンケート調査を行ったところ、自ら適切に対応できるという自信を示す「自己効力感」が活動後に高まっていたことが分かりました。被災者を勇気づける一方で、学生が被災地支援を通じて成長するきっかけを与えていただいているという側面があります。机の上では学ぶことのできない貴重な経験だと考えています。

宮城県亘理町でサロン活動を行う学生＝2018年3月

いつ、誰がどこで自然災害の脅威にさらされるかは予測が困難です。さらに地震や風水害など、さまざまな災害に備える必要があります。備えるといっても、各家庭や地域ごとに、必要な物資も、避難場所も異なるでしょう。それぞれが柔軟に対応できるよう、シミュレーションをしておくことが重要です。

パネルディスカッション

武山教授　災害はいつ、どこで発生するか分かりません。そのため、日頃からの備えについて、皆で知恵を出し合い、柔軟に対応することが求められます。防災に携わる専門家、住民、学生から、それぞれの取り組みを紹介してもらいます。

北村氏　数多くの災害現場にボランティアとして足を運んできました。この夏に西日本豪雨の被災地である広島県を訪問しましたが、その際に目に付いたのが、側溝に堆積した土砂です。側溝が埋まり、水をうまく排出できない状態でした。次に雨が降れば、すぐに水があふれてしまいます。

土砂を取り除こうとしても、人力では相当な時間が必要になり、対応しきれません。事前に危険性を察知し、川の泥上げなどを済ませておくことが災害の備えになると、あらためて実感しました。

森氏　かほく市七窪区では大規模災害時の安否確認を円滑に進めるために、家族台帳を作りました。すべての世帯が登録しており、万一を想定して繰り返し訓練を行うことで、迅速な安否確認に努めたいと思います。

毎年の防災訓練では、自動体外式除細動器（AED）など体験型の訓練を行うよう工夫しています。

曽根氏　災害への備えとして健康面のケアも大事になります。避難所生活が長引くと、だれでも健康を損なう恐れが出てきます。いつも通りの食事、睡眠ができないことに加え、プライバシーが確保できないというストレスも重なり、体調を崩しやすくなります。高齢者や障がいのある方、妊娠中の方、産後間もないお母さん、乳幼児には配慮が必要です。特に注意が必要なのは、持病を抱えている人です。普段飲んでいる薬を非常持ち出し袋に用意するなどして、自らの健康を守る必要があります。家族がどのような薬を服用しているかを、日頃から把握しておくことも大切になります。

災害ボランティア・サークル「ふたば」　2013年から、かほく市の防災訓練に参加しています。スーパーの袋を活用した骨折箇所の固定方法など、身の回りの物を生かした防災グッズを紹介し、「これなら私でもできそう」と、感じてもらえるように工夫しています。

最近では、能美市の防災フェスタや羽咋市の防災訓練にも参加し、活動の幅を広げています。お年寄りの参加者が大半ですが、今後は子ども向けのプログラムを考え、幅広い世代が防災意識を高めるためのお手伝いをしたいと考えています。

参加者

北村　裕一氏
日本赤十字社石川県支部
防災ボランティアリーダー

森　　義実氏
かほく市七窪区防災士

曽根　志穂氏
石川県立看護大学地域看護学助教

災害ボランティア・サークル「ふたば」
（江縁はるなさん、霞流恋さん、角まどかさん）

進　行：武山教授

防災のあり方について話し合うパネリスト

避難時に薬の確保は

北國 健康生きがい支援機構　事務局：北國新聞社広報部

【主催】石川県立看護大学、北國新聞社